

仕フ、遂ニ自然ラ其ノ感應有テ、春ノ野ニ出テ、菜ヲ採テ食スル程ニ、自然ラ仙草ヲ食シテ、天ヲ飛
ブ事ヲ得タリ、心風流ナル者ハ、佛法ヲ不修行ト云ヘドモ、仙藥ヲ食シテ、此ク仙ト成ケリ、此レヲ
服仙藥ト云フナルベシ、心直クシテ仙藥ヲ食シツレバ、女也ト云ヘドモ、仙ニ成テ空ヲ飛ブ事如
此シ、○下略

〔西海雜誌〕霧島が嶽は、日向大隅薩摩の三箇國に跨り、○中略其大隅の方なるは西霧島と云て、頗大
社にして、何時の世より太敷ますとは知らざれども、空海一度錫を入られし後は、華林寺聞錫杖
聲院と號て、今は密宗の精舎となりにけり、予天保七申歲、登山して歸るさ、此寺に宿りしに、方丈
五峯和尚予が遠方より來遊を愛て、いと叮嚀に饗し、相見を免されしに、頗道徳堅固の僧にして、
げに如此靈地に掛錫なしたまふことわりと覺えき、○中略種々山中の奇を譚聞せたまふ、其中に
も實に奇なるは、當寺に年久しく仕ける下僕五助と云るものあり、日々山中に入て樵けるに、時
として一の桃林に到る事ありけり、さして寺より遠くとも思はず、又近しくとも決し難きが、此林
に到れるに、二八ばかりよりまだ三十歳に足らぬ、みめよき女子ども、種々のうつくしき衣服に
て遊び戯れたまひけるが、其年長と見えて、別て衣服もうつくしく、異様なる婦人、五助を呼て、世
の中の事どもを尋問つ、桃を與へて云らく、此桃を食する時は、不老長生にして、我等が如く何
時迄も、歡樂に月日を送る身となるべし、然し必此林より外へ持出る事なかれ、若我が言を犯す
時は、其詮なしとぞ深く戒め與へき、五助も始の程は其教を守りしに、後にふと過て其事を人に
譚しかば、朋輩どもなどの云には、それこそ狐狸の爲に、馬糞など與へられしならめなど嘲られ
しかば、其くちをしさに、後には仙女の戒を犯して、時々寺に桃を持歸て、朋輩又は沙彌扈從等へ
も、勸めしかば、皆の者も漸に五助の言を信じ、我も伴れ行ん、誰も見んと五助の後に附て入るに、
終日桃林に至る事を得ずして、空しく歸りぬれども、時ならざるに桃を持歸るにて、其言の虚談